



《ボケたがらないツッコミたがる現代人／ツッコミ過多の時代「ボケ」に回ろう／／「ツッコみ続けたまま、お前は死ぬのか？」文章を書く者と読む者突きつけられる／ボケに回る勇気／「異常な熱量」／異常な熱量を持って「ボケ」に立ったバンド／ネットに文章シコシコ書く意義の消失》

お笑い芸人じゃなく一般人がツッコミとボケという役割を意識する風景が当たり前になった現代。ボケに回らないことで自分自身が傷付かないように、ある種恐れに似た意識でツッコミに回っている。しかし、死ぬ直前に、「他人にツッコまれた自分のあり方」は振り返ることはできるが、「自分が他人に行ったツッコミ」を振り返ることはないだろう。

「ツッコみ続けたまま、お前は死ぬのか？」それはレビューを読む者と書く者の両方に突きつけられる。ネットに漂う多くのレビューはツッコミだ。自分は誰かより良いツッコミを行おうと常に考えて書かれたものだ。しかし、これからのレビューは違う。レビューも「ボケ」でいくべきなのだ

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、異常な熱量とツッコミ過多の現代を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます

。

# 神聖かまってちゃんとツツコミ過多の現代

一億総ツツコミ時代に生きるぼくらの世代の生き方  
～世界の中心で魂を取り戻す神聖かまってちゃんたち

「減るもんじゃねーだろとか言われたのでとりあえずやってみたらちゃんと減った。私の自尊心。返せ。とか言ってももちろん佐野は返してくれないし、自尊心はそもそも返してもらえないもんじゃなくて取り戻すもんだし」

(『阿修羅ガール』：舞城王太郎)

わたしは現在、この八回ほど投稿している。一ヶ月の間に、だ。これはもはやテロである。怒髪天の増子がどこかの雑誌のインタビューで、ロックっていうのは嫌がらせだから、テロだよロックは、と言っていたので、影響を受けやすいわたしはすぐさま、このロックテロをしかけている。

もっとブラッシュアップして渾身の一個を送れよ？と思われるかもしれない。

わたしもそう思っていた。ひとつの文章をああでもないこうでもないと書いては消し書いては消し、石を積み上げたら鬼に崩されるというあの地獄の諸行を自分で行っていた。

もはや精神は、合間のエロ画像検索によってかろうじて一筋保たれているだけだった。  
↓

もはや精神は、合間のエロ画像検索によってかろうじて一筋保たれているだけだった。

そんなとき、『愛のむきだし』や『完全自殺サークル』を監督した園子温が雑誌で、「質より量ですよ。ぼくも何が当たるか分からないんです。いっぱい作ったらその中で良いものを誰かが見つけてくれる」と言っていた。そうだったのか。世界の真理はそれだ。たしかに、自分が良いと思ったものが人に支持されるとは限らない。

アンケート至上主義である超体育会系の週刊少年ジャンプですら、編集者システムをとっているではないか。

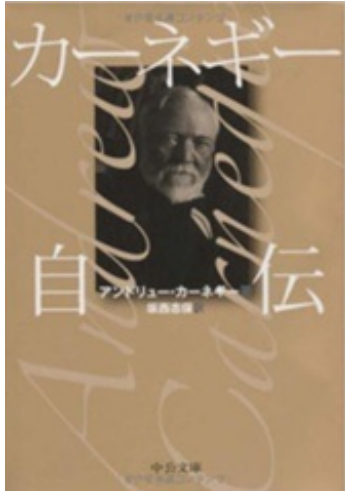
ナルトもワンピースも、あのハンター×ハンターでさえ、編集者という客観的なフィルターを通さねば、あんなにも支持されてはいない。

そうして覚醒したわたしは、中学三年にも劣る陳腐な文章能力でなんとか書いている。↓



そうして覚醒したわたしは、中学三年にも劣る陳腐な文章能力でなんとか書いている。しかし、これやってみると気付いたのだが、意外に書きたいことがすぐ尽きてしまった。園子温の言葉を聞く前は、「ロックに関して伝えたいことがたくさんある」なんて思っていたが、量を優先して書いてみると、案外はやく構想がなくなった。一〇稿にも到達してないのに、尽きた。

アンドリュー・カーネギーという人がいる。↓





案外はやく構想がなくなった。一〇稿にも到達してないのに、尽きた。

アンドリュー・カーネギーという人がいる。アメリカの有名な実業家で、鉄鋼王カーネギーとして知られている。彼は不倫相手から子どもの認知、甥っ子が警察沙汰、政治家からの不当な圧力で会社が存亡の危機、今夜食事に行かなければ離婚など、すべての危機が同時に頂点に達していた。自殺しかないと思ったカーネギー。彼は遺書を書くときに、「死にたいぐらいに悩んでいるんだから、さぞかし自分には深い悩みが多いんだろう。いったいいくつくらいあるんだ？」とふと思って付箋にえんぴつで悩みを書き出してみたという。

当時、彼は「世界で一番忙しい男」と言われていた。悩みは絶対に何百もあるに違いないと思っていたカーネギー。しかし、60個ぐらい書いたところで、鉛筆がピタリと止まったという。がんばってひねり出してもその程度の数。そう気づいて、悩みを解決すべき優先順位をつけたカーネギーはその晩に奥さんと夕食に出かけたという。

その事例から分かるように、自分から出てくるものは、案外少ない。宮崎駿は作品を作るとき  
のアイデアを、↓

宮崎駿は作品を作るときのアイデアを、若い時に描きまくったイメージボード（頭に浮かんだイメージを思いついたまま描く絵）から参照しているという。自身が監督、脚本を務めた映画『風立ちぬ』の劇中では「創造的人生の持ち時間は一〇年だ」とキャラクターに言わせている。世界レベルの創造エンジンを持っている宮崎駿でさえ、無尽蔵にアイデアが閃いてるわけではなく、若い時に出したアイデアを使っている。量が成すことは大きい。

いきなりだが提案したい。↓



いきなりだが提案したい。雑誌読者はこの時代、どんな読者レビューを読みたいのか。初めに言うてしまうが、それは「超個人的なこと」を書いているものだ。

ネット空間に無尽蔵にあるブログも超個人的なものだろ違いがないじゃん、という反論は分かる。しかし、それが少し変わってきたようにわたしは感じている。

今は個人がブログを書いて発表できる時代である。そんな時に雑誌のレビュー投稿は意味をなくす。検索をかければゴマンと高度なレビューが出てくるのだから。熱量だけ無駄にあっても稚拙な文章というのは存在こそ輝いているもののネットの海に埋もれてしまう。ブログやツイッターやSNSサイトの台頭によって、読者投稿の雑誌レビューが力を無くしてきた。しかし、流れが変わりはじめた。今超個人的なことはブログに書かないという保守化に傾いているように思う。

ネットリテラシーが少しでもある者なら分かると思うが、「炎上」「晒し」というものが影響を与えている。超個人的なことを書くと、どこからか手が伸びて、何の承諾もなしにネットのある大きい空間で話題になるという現象を、マスメディアが積極的に取り上げたのが二〇一三年だった。当然、社会的に罰せられるべき事柄もあった。公共性のある空間で全裸写真を上げたり、飲酒運転や無免許運転などは当然、具合のいいことではない。肯定したくない。

その一方で、ネットのなかに息苦しさをを感じる瞬間もできたように思う。そもそも、↓

その一方で、ネットのなかに息苦しさをを感じる瞬間もできたように思う。そもそも、超個人的なことで他人が面白いと思える事柄といえば、ギリギリアウトな事柄である。

芸能人がテレビで披露する「笑えるエピソード」も社会的にギリギリアウトなものが多い。そういう事を人は知りたいものだ。

人はリツイートされる快感を知ってしまった。ネット空間ではいま、反社会的な事柄に対する厳しい目がある。ネットはロクデナシが息をする場所だった。それはもう昔のことになった。

そこでジャパンレビューですよ！！ここでなら、ネットにさらされることはない。↓

そこでジャパンレビューですよ！！ここでなら、ネットにさらされることはない。ロックに対する異常な熱量はここで発散、交換するんだ。

雑誌はわたしたち読者に心を開いてくれている。その期待を裏切らないようにしよう。きみ、雑誌読者の超個人的なこと知りたくないかい？わたしは知りたいぞ。いつ性目覚めて、好きだった子がサッカー部と付き合っていた絶望したか、あの子のこと好きだけどぶっ殺したいなーとか、そのとき聴いた音楽がなんなのかとか、体操着を盗んだことをいまでも後悔しているとか、知りたいぞ。紙の時代がくる！また！！

わたしたちの勝ちだ。

「異常な熱量」が二〇一四年以降の文化的キーワードになることは間違いない。↓

「異常な熱量」が二〇一四年以降の文化的キーワードになることは間違いない。それはお笑い芸人マキタスポーツの著書『一億総ツッコミ時代』に書かれている、「現代はツッコミ過多」なので「ボケ」に回ろう、というメッセージを読み解くと分かる。

もう少し説明すると、お笑い芸人じゃなく一般人がツッコミとボケという役割を意識する風景が当たり前になった現代。自分がツッコミ側にいることで人より優位に立っている気になりたい人が多い。同時に、ボケに回らないことで自分自身が傷付かないように、ある種恐れに似た意識でツッコミに回っている。しかし、死ぬ直前に、「他人にツッコまれた自分のあり方」は振り返ることはできるが、「自分が他人に行ったツッコミ」を振り返ることはないだろう。

「ツッコみ続けたまま、お前は死ぬのか？」それはレビューを読む者と書く者の両方に突きつけられる。↓

死ぬ直前に、「他人にツッコまれた自分のあり方」は振り返ることはできるが、「自分が他人に行ったツッコミ」を振り返ることはないだろう。

「ツッコみ続けたまま、お前は死ぬのか？」それはレビューを読む者と書く者の両方に突きつけられる。ネットに漂う多くのレビューはツッコミだ。自分は誰かより良いツッコミを行おうと常に考えて書かれたものだ。

しかし、これからのレビューは違う。レビューも「ボケ」でいくべきなのだ。レビューでボケに回るには二つ必要なものがある。ひとつは「異常な熱量」である。もうひとつは「雑誌媒体」である。異常な熱量だけあってもそれはむなしく空をきってしまう。必要なのはそれを受け止める強度がある受け皿だ。それが雑誌である。↓



神聖かまってちゃんは、異常な熱量を持って「ボケ」に立ったバンドだ。

その受け皿がインターネットだった。神聖かまってちゃんはボケてボケてボケまくった。それは、ツッコミ過多のこの時代に異常な熱量で矢面に立つということだ。「死ね」という外部の容赦ないツッコミをの子は自らそれを自分のネタ（の子の口癖）に変換して「ボケ」返す。さらにツッコミが来る。それも拾い上げて自分たちのボケにしていく。

かまってちゃんはツッコミ過多の時代に、音楽業界で一番ツッコミが来るインターネットという場に自らを置いた。神聖かまってちゃんを検索するとユーチューブで彼らの曲がたくさんアップされている。その鉱脈によってリスナーはさらにツッコミ所を得て、バンドは勢いを増す。質より量を優先した結果だ。それらの事柄によって、神聖かまってちゃんは他のバンドとは違う方法で、ロックシーンに殴り込みに来た。↓

異常な熱量でボケに回ることを恐れないことが彼らの示した今の時代のあり方だ。

もうひとつ、ロックシーンに熱量を注ぎ込むのはロックバンドだけではない。

レビューを書く者も読む者も自覚的にボケに回ることでロックバンドと同じようにロックシーンに熱量を注ぎ込むことが出来るはずだ。↓



うおお

## 神聖かまってちゃん

<http://p.booklog.jp/book/82754>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82754>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ